

「一期一会」

寺子屋プロジェクト和尚の話 第18回：「一期一会」

今回は松原泰道師の「禅語百選」から「一期一会」のお話を致します。

師は「虚堂録(キトウロク 注1)の「相送って門に当れば修竹あり。君がために葉々清風起る」のなかに友との交情の濃やかさとともに「一期一会」の厳しい出会いを感じると述べ、「一期(イチゴ)は人間の一生、一会(イチエ)はただ一度の出会いです。これほど「一」の肅然としたたたずまいを感じる語は、他に類例を見ません。」と言います。

人の生涯はこの世に生を受けて死ぬまで一回、その一生において友人と幾度となく会合するとしても、その一度一度の「会う」は決して同じではありません。そのことは毎日顔を合わす親子、夫婦の肉親も同じことです。

師は父から「会ったときが別れだぞ」とよく教えられたと言います。「会ったときが別れだから、人には親切に、すべてに丁寧にあれ」と。

人と会うその時を、一瞬ともおろそかにしないで大切に<生ききる>ということであり、そのころは前回の「日日是好日」と通じます。

千利休の弟子である山上宗二は、利休の言葉として「常ノ茶湯ナリトモ、路地へ入ルヨリ出ルマデ、一期ニ一度ノ会ノヨウニ、亭主ヲ敬イ畏レルベシ」を残しています。

桜田門外の変で暗殺された大老・井伊直弼は茶人としても名を知られ、古人の言葉を引いて「茶湯一会集(チャウイチエウシユ)」を著わしています。(注2)

その「一会集」では、「幾度おなじ主客交会するとも、今日の会にふたたびかえらざる事を思えば、実に我一世一度の会なり」とあります。

また続けて「独座観念」として、茶会が終わって退出の挨拶を交わした後も、客は大声で話したりせず静かにあとを見返りして出て行くことし、主人も客が見えなくなるまで見送って、決して取り片づけなど急いではならず、茶席に戻って独り座しては「今日、一期一会済みて、ふたたびかえらざる事を観念し、或いは独服をもいたす事、この一会極意の習いなり、この時寂寞として、うち語らうものとは、釜一口のみにして、外に物なし、誠に自得せざればいたりたき境界なり」と結んでいます。

松原師は、このことから「一期一会」を「他者との出会いだけでなく、自分が真実の自己に邂逅することの困難さと受け止め・・・それは他者との出会いと別箇のものではないから「一」です。また、相送る「相」に「一如」を感じます。」と述べています。

生涯に二度と無い大切な「会」と思えば、それを自己と相手が深いところで出会う貴重な「会」にしなければなりません。

それには自己が「父母未生本来の面目」に邂逅しなければ実現できない、師はその困難さを指摘しながら、なお本来の自己に出会うことは他者と出会うことと別箇ではない、他もなく自もない「一」だといいます。

また「相送る」の「相」に、「送る」「送られる」にも、「主人」「客」にも「一如」を感じるとします。

(注1)虚堂録：南宋末の虚堂智愚(1185～1269)の語録。虚堂は大応国師南浦紹明の師に当り出版(1269年)と同時に日本に伝わり、宋版に漏れた作品と「行状」を合わせて覆刻されたそうです。

(注2)山上宗二(ヤノウエ ヲジ)：1544～1590 堺の豪商、茶人。千利休の高弟で豊臣秀吉に茶匠として仕え、理非曲直によって秀吉の怒りを買って浪人、その後、北条氏攻略後に秀吉が赦免しようとしたが再び怒りを買って打ち首になる。箱根湯本に追善碑があるそうです。